

都市公共政策ワークショップⅡ 議事録

都市から政治を考える

—反コミュニティの〈まちづくり〉—

講師 政治学者・都市ガバナンス研究所代表 竹井隆人先生
指導教員 水上啓吾
日時 平成27年11月13日（金）午後6時30分～9時20分
場所 大阪市立大学大学院 梅田サテライト6階 107教室
議事録担当 M1 關谷雅彦

はじめに

皆さんは、私の著書である『デモクラシーを〈まちづくり〉から始めよう』平凡社（2013）を、読まれているようですが、自分では少し前の『社会を作る自由』ちくま新書（2009）のほうが自信作です。私の著書は、一般受けはしないけれども、一部に熱狂的な支持層がいるようです。なぜなら、大学の入試問題にかなり採用されていますが、それは試験問題の特殊性からすると、一部の研究者に強固な支持者がいることの証拠です。

本日は、「都市」を中心に話をします。私は、「政治」を考えるうえで、国政や自治体の「政治」を考えるよりは、もっと小さな、そして人びとにとって身近な、「都市」から考えていったほうが良いと考えています。

この考えを話していけば、本日の後半には、私の考える「都市」とは何かを説明することにもなると思います。

「政治」と〈まちづくり〉

大雑把に申してしまえば「政治」とは「社会をつくること」であり、その社会とは個人の権利や自由と対立するものです。かつては、王様や貴族などの権門が「社会をつくること＝政治」の権能を握っていましたが、現代社会は、その権門を否定し、個人の権利と結び付くようになります。つまり、民主主義に則って人びと個人が「社会をつくる」権利をもち、その主体と捉えられるようになります。

よって、人びとの互いの意見調整、「合意＝集团的決定」が必要となるのであり、現代の「政治」とは人びとの「集团的決定をめぐるすべての事象」のこととなるのです。

こう考えると、人びとはあらゆる集団において「政治」に関わるのが必然となります。それは学校、職場、地域、そして家族や夫婦までもが「政治」を要する集団だからであり、このことから人は「政治」から逃れ得ない存在であることがわかるはずです。

地域、すなわち〈まち〉では何らかの集团的決定、つまり「政治」という手続きを要

するのであり、それが〈まちづくり〉なのです。だから、〈まちづくり〉のことを「コミュニティ」と言い換える人が多いですが、それはマヤカシです。「コミュニティ」とは、集団そのものを指すのではなく、人間関係の表面的な交流、すなわち「仲良し」と捉えられている面が強いように思います。このことは、「政治」にとってはむしろ大きな障害なのではないかと考えています。

「コミュニティ」とは？

「コミュニティ」は、主に2つの意味で使われているはずですが、それは、①共同体（社会）そのものを意味する場合と、②その共同体内の人的交流、「仲良し」という人間関係の交情を意味する場合です。最近では後者の意味合いで使われていることが多いように思います。

この「仲良し」の偏重は、「社会（「コミュニティ」）」を揺るがす危険性があるのではないかと私は考えています。これは、一般の常識的な捉え方とは異なっています。

たとえば、東日本大震災の時のことですが、川崎市長が瓦礫処理の受け入れを表明した際に、川崎市民は「頑張ろう日本」と言うことには違和感を表明せずにおきながら、瓦礫処理受け入れには猛烈な拒否反応を示しました。つまり「頑張ろう日本」は、表面的で一過性のものだったのであり、自らの安全を脅かさない範囲内だけでの連帯の表明に過ぎなかったのです。

被災地以外の人びとは、家族や家庭を失った被災者に気軽に「頑張ろう」と声を掛けますが、その声を掛けられた当の被災者は、そのような言葉を投げつけられても本当は腹が立つだけなのですが、拒否できずに「ありがとうございます」としか答えられないのです。そこには、抵抗できない強烈な同調圧力があるのです。

阪神淡路大震災の際にも「コミュニティがあるから被害が少なく済んだ」などとオザナリの論評をする人がいましたが、それならば、その社会では部外者で被災した人は助けることなどなかったのか、あるいは「仲良し」ではなかった人は助けなかったのか、ということになります。ですから、こういう論理は間違っているのです。

しかしながら、こうした認識や論理が堂々と横行していることから、「コミュニティ＝仲良し」は、ただ偏狭で、表面的で、一過性であることを露呈しています。

「コミュニティ」の問題

この「コミュニティ＝仲良し」の一次的問題は、特定の人々だけを包摂するということです。そして、この「仲良し」が成就しても、それは一過性です。

また、その二次的問題は、「仲良し」の完成により、同調圧力による排除性が高まってしまい、集団としては独りよがりになることが多いことです。

おそらく官民間わず組織（職場）の上司には、「社会のことを考えろ。」などと言う人がいることでしょう。

こういう人ほど、ほぼ例外なく組織のことなどでなく自分のこと、すなわち出世のことしか考えていません。こういうサラリーマンとして偉くなる人は、調和的です。空気や大勢に従って、「コミュニティ」に同調することを強調するのであり、それは楽な生き方を選択しているはずです。

こういう人たちは謙虚さと無縁であり、権威に従い、弱いものに強い姿勢をとり、反りの合わない人を排斥する傾向があります。自分と社会を切り離してしまい、社会のことよりも、そこで如何に振る舞えば自分が評価されるかしか考えていないのであり、こういう人こそ社会がどうすれば良くなるかを考えることを放棄しているのであり、社会のことを最も考えてないのです。

こうした「コミュニティ」の信奉者がもてはやす人びと同士相互交流とは、本当はその交流が密になればなるほど愛憎が増幅するのです。例を挙げれば切りがありませんが、殺人事件は、通りすがりの、見ず知らずの犯人による行為は少なく、9割以上は顔見知りによる犯行なのです。

そして、「コミュニティ＝仲良し」は、それが表面的であればあるほど、生計維持のための相互扶助には踏み込みません。つまり、相互扶助がないまま、他人への期待と要求が高まるというアンバランスさを増幅させる結果、乱轢を生じやすくなり、期待や要求に応えなければ、かえって暴力や無視などのマイナスの関係に至ることも少なくないのですが、「コミュニティ」を闇雲に信じている方は、この事実を目をつぶるか、それを知っていても決して口にしないのです。

よって、こうした「コミュニティ＝仲良し」を集団の組成原理とし、集団決定とイコールにすると問題が生じるのです。

他人との「交流」の広さを誇る「コミュニティ」信者がいますが、それは人間関係にますます濃淡をつけるだけです。彼らの目指す濃淡をつけない「(万人との)交流」などは神でなければできない行為です。それをトコトンまで突き詰めていくと、それはまったく誰も愛さないことと同等になってしまはずです。したがって、「普遍愛」などというものは自分の子でさえ捨て去る釈迦のような神でなくばできないのであり、矛盾があるのであって、神に及ばぬ、我が子が他人よりも愛しい凡人たちが、「コミュニティ」を社会構築の原理とするのではまったく不資格なのです。

ある「コミュニティ＝仲良し」の達人と称する学者は、「私は、友達が一万人いる。」と自慢げに言ってまわっていましたが、一万人の「仲良し」グループを作ったということは、その1万人を最上層の一方で、その1万人以外の人びとを排斥することを知らないものであり、彼の信奉する「誰とも仲良し」とは何の関係もないことをわかっていないのです。

「コミュニティ」から「ガバナンス」へ

よって、私は社会組成原理を「コミュニティ＝仲良し」に求めるのではなく、それと

は異なる政治的合意に求めれば良いのではないかと考えます。これを「ガバナンス」と名づけます。そして、このことを「都市」で考えたらどうなるかを検討してみましよう。

20世紀初頭に、ハワードという民間人が考えた「ガーデンシティ（田園都市）」というのがあります。これは田園と都市を合体したもので、各国のベッドタウンの先駆となって、今でも非常に称賛されています。

しかし、ハワードの思想は、建築や都市計画など工学的観点のみが注目されますが、もっと大事なものは、そのソフト的な観点です。つまり、管理・運営など政治経済的な面があってこそハワードの田園都市は際立つのです。ところが、物理的側面のみが諸外国で取り込まれたのであり、その我が国での一例は、東京の田園調布です。

一方、アメリカはガーデンシティのソフト的な面をアメリカ流に吸収しているのです。アメリカの郊外というと広く美しいなど、視覚的に素晴らしいものと映りがちですが、見た目だけでよいなら日本でも郊外では同じような居住区はいくらでもあります。

しかし、日米の違いは、日本ではニュータウンがすぐさまオールドタウンと化すことであって、要するに日本ではそれを持続するシステム、つまり社会的システムとして統御すべき「政治」が不在なのです。このことは、保安（セキュリティ）に着目すればわかりやすいと思います。

ゲーテッド・コミュニティ

アメリカでは居住区の外周部を障壁で取り囲むゲーテッド・コミュニティが興隆しています。こうした居住区ではゲートを通らないと進入できず、そのゲートでは進入する人に対して入念なチェックが行われます。

実は、このゲーテッド・コミュニティは、ハワードのガーデンシティを変形した、アメリカ版といえるのです。

ゲーテッド・コミュニティには幾つかのタイプがあります。

ひとつはライフスタイル型と呼ばれるもので、年齢制限があるなどリタイアした高齢者向けのものです。

また、威信型と呼ばれる、金持ちが自分たちの居住区のステータスを誇示するものがあります。

こうしたゲーテッド・コミュニティは、全米で普及しており、郊外の街並みを一変させています。日本でも10年くらい前に、そのセキュリティが評判になりましたが、貧乏人を排除するものとして批判的に受け取られていました。

ただ、私の見立てでは、これはオートロック式のマンションも同様です。ところが、オートロック式のマンションに住んでいてゲーテッド・コミュニティを批判する人が少なからずいます。また、ゲーテッド・コミュニティを批判している某テレビ局取材を

よく受けましたが、その社屋に入るには、厳重な警備を施したオートロックを幾度も通らねばなりませんでしたから、非常に矛盾があることが看過されています。

私は、批判する人たちとは逆にゲーテッド・コミュニティにはプラスの可能性があると考えています。

わが国で参考にすべき点

私はゲーテッド・コミュニティのようにセキュリティを契機にすれば、「官」に頼らず自分たちで社会をつくる「私立」が芽生えると考えています。

先にあげたゲーテッド・コミュニティの類型には、もうひとつ保安圏型ゲーテッド・コミュニティというものがあります。これは先に挙げたライフスタイル型や威信型と根本から異なり、デベロッパーが開発するのではなく、もともとの住民がつくりあげる社会です。

すなわち、住民たちが行政から道路を買い取ってそれを封鎖し、ゲートを設置するのであり、セキュリティを確保するために過大な資本を要します。そして、この社会資本を自分達で調達し、自分達でコントロールするのであり、それには社会に対する絶えざる意識が必要となります。

わが国では、表面的かつ物理的に美しい〈まち〉はあっても、その美しさを持続させるためのルールを執行していく政体（政府）が不在です。「コミュニティ＝仲良し」が信奉される我が国では、仲間同士の暗黙の了解や、仲間内での「空気」により専制が敷かれますが、明確な「制限」の設定と「執行」が、そしてそれを司る政体が必要なのです。

たとえば、〈まち〉に高層マンションの建設反対運動がよく散見されますが、それが法的に建設可能な〈まち〉となっていることがおかしいのであり、そうした緩い「制限」を野放しにして「政治」に関わらないでおきながら、建設に反対することが矛盾しているのです。「コミュニティ＝仲良し」で強制し、縛るのではなく、地区計画等で明確な「制限」を用意する「政治」をすべきなのです。

ゲーテッド・コミュニティ、とくに保安圏型にヒントを求めれば、「官治」でない、自ら治める集団体制による「私立」の状態をつくることができます。

そして「コミュニティ＝仲良し」に対抗するためには、社会の成員全員を巻き込むサステナビリティを求める集団組織と、その組成原理が必要です。それが、私のいう政治的共同性であり「ガバナンス」なのです。

よって、〈まち〉に一つの政体をつくりあげ、その政体には住民自らが関与することで、住民自身が統治者となることがその一手法なのです。

公的政府から私的政府へ

あるアメリカの政治学者は、ゲーテッド・コミュニティは、プライベートガバメント（私

的政府) であると言っています。

それは政治的責任の遂行、すなわち「制限」の制定と、その「執行」を行うからです。

私は、住民が直接関与して、その直接統治する政府が〈まち〉を統治する体制を作る必要があると考えています。この考えは世で喧伝されるいわゆる「地方分権」や「道州制」といったものとは全く違います。

かつて福沢諭吉は「国家は私情より発す」と唱えましたが、それに私の考え方は近いのであり、「官」ではなく「私」から社会をつくる契機は生じるのだと思います。

住宅を取り上げて考えれば、これまで「政治」について述べたことを理解いただきやすいかもしれません。昔は風呂、便所などは住宅の中にはなく、すべて周りの人びととの共用でした。また、人びと同士での生活物資の扶助も行っていました。

ところが現在では、住宅内にすべての機能が完結しており、他人と共用する必要がなくなってしまう、おそらく、それがために、他人との関係は、生活には必要のない、いわばどうでもよい目的の「交流」しか残らなくなったのであり、その結果として、集団的な決定を他人と近隣で為す機会も失われてしまい、「政治」も消えてしまったものと私はみています。このことが自治会や町内会の凋落にも繋がっています。

そして、人びとは「政治」といえば単に既存の公的政府について投票することしかすることがなくなってしまう、おそらく、それでは物足りないから「コミュニティ」が必要だ、などと叫んでいるのではないかと私は疑っています。

ですから、公共という「公的政府」から自分たちの手に「政治」を取り戻す必要があるのです。

私が批判した「コミュニティ＝仲良し」の促進剤となるのは、表面的交流や共同飲食です。

この「コミュニティ」は「日本教」ともいうべきもので無主義のようにとらえられがちです。それは右に倣い、大勢に同調することを主義とするからです。それで何となく社会に抵抗できない体制を整えていくのであって、そうした社会では「政治」も不要だったのです。その一因は、諸外国と異なり城郭都市が無かったという天然セキュリティ社会にあったのですが、勘違いしてならないのは「日本教」には「大勢同調＝仲良し」という強烈な主義があったことです。

皆さんは、「都市」とは何か、考えたことはありますか。こういうことをまともに考えた学者が我が国にはいないのですが、私は囲われた〈まち〉というものが「都市」であり、そういう「都市」が無かった我が国には「政治」もなかったのだと考えます。

「政治」を取り戻す契機

高度成長期に大量に量産されたインフラは、今後ますます劣化し、修理・更新に膨大な費用を要します。その危機について「公的政府」は、将来は「住民と協力して」対応

するなど適当なことを言っています。

私はこうした危機が増幅すれば、「私的政府」を生み、「政治」を人びとが司る契機に成るのではと半ば期待しています。

たとえば、道路はそれを必要とする人が集まって「政治」によって維持していけばよいのです。

また、セキュリティについては、「官」が頼りないものとなれば、自分達で自衛するしか方法はなくなります。それが保安圏型ゲートド・コミュニティの原動力となっているのです。

同様に食糧危機や年金崩壊といった「公的政府」では対処できない事態が発生すれば、「私的政府」で対処するしかなくなります。

そんなことができるのか、と思う人もいるでしょう。しかし、たとえばわが国では、「日本教」が途切れ、「コミュニティ＝仲良し」が崩れた中世という時代があります。国政を担うはずの室町幕府は何もしてくれません。黒澤明の映画『七人の侍』で表現されたように、村人が自分たちで村を守るのです。

皆さんは、「市民」とは何か、考えたことはあるでしょうか。一般的な定義は緩く、このような言葉の定義を考える人はいないでしょう。私は、「都市」に住んで、「都市」を共同で切り盛りしていく責任を持ち、コミットしている人を「市民」と考えます。

西欧では「(城郭) 都市」で、セキュリティを保つために他人とともに戦って防備していく人を「市民」と言ったのです。共同の施設やサービスを負担する責任を持ち、運用をする人しか「市民」ではないのです。

私のいう「私的政府」に近いものが我が国にもあると思っています。我が国ではゲートド・コミュニティに似たものとして、分譲マンションがあると指摘したことがあります。そのマンションの管理組合は自治組織であり、公的なサービスを実施しますが、それには物足りなさを感じます。このことはアメリカのゲートド・コミュニティについても同様です。

こういう「私的政府」は、もっと多様で大きな権限とサービスを実行していくべきであり、それがなければ人びとはそうした政治活動をオザナリにしているのです。

権限強化とは、たとえば道路改修とか福祉充実など、「公的政府」の手の回らない所に権限を広げていくことであり、そうした「私的政府」が充実することで〈まち〉が「都市」になり、人びとが「市民」になっていく可能性があります。

我が国に限らず、人びとからは「政治」が失われています。「政治」をもたらすのはデモ行進や投票などではなく、私の提言するようないわば究極の（常識とは異なる）地方分権ではないか、と確信しています。

質疑応答

Q1. 先生の本を読ませていただきました。岸和田祭の結びつきは自分たちだけでつ

くる独自の組織です。祭りに参加していない人の排除はないですし、先生の言う「私的政府」に近いです。「私的政府」のアクティブな成功事例はございますか？

A 1. 長野県の最北端の町では、週末に皆で「道普請」をしています。全員出席であり、欠席費用を出すきまりもあります。

拙著に述べた祭礼の項に戻ると、ディズニーランドのことを書いています。東京ディズニーランドでは盛大なパレードをしています。それは日本の祭礼の山鉾の真似をしているのだと思います。それが証拠に、香港のディズニーランドのパレードではミッキーマウスが乗った1台だけ全速力で走って行きました。ロスのディズニーランドではパレード自体を見たことはありません。

祭礼は宗教行為であるはずですが、私は祇園の生まれですが、今の祇園祭は見る気がしません。祭りではなくパレードに近づいています。見ている人は京都以外の人が多く、祭礼を宗教行為であると認識する人はまずいないと思います。

昔の人は、自分以外の「強大な力」の存在を認め、それを崇めたり恐れたりします。現代人はそういう存在を認めずに、それでいて天災が来たら慌てます。古代の人びとは、神を恐れる謙虚さを持ち、だから神を饗応する祭礼を重視したのです。

これはいわゆる「自由」の捉え方とも通じています。人間は本来何でも独りでできる「自由」を持ち得ないし、ましてや万能の「神」などではあり得ません。だからこそ、「強大な力」を畏れ、祭礼では禊をし、神をお迎えし饗応することを重視するのであり、現代人は宗教性を取り戻し、もっと謙虚さをもつべきと考えます。

Q 2. 私が所属する町内会では、高齢者の見守りや児童の登校支援などを行っていますが、マンションにも高齢者や子供が居住しているにもかかわらず、マンションの住人が町内会に入会してくれません。マンションの住人からは、既存の自治会はどういうふうに見えているのでしょうか？この問題に対して先生はどういう考えをお持ちでしょうか？

A 2. 町内会や自治会は、もっと権能を強くすべきであると考えます。入会しないのは、その必要性がないからです。必要性を持たせるためには、町内会等に入っていないと生活できないようにすることです。たとえば、道路を町内会等の所有として、道路を封鎖し、固定資産税の一部を町内会等に割譲させ、それをもって道路管理を町内会等に移管します。道路には舗装が当然視されていますが、舗装がなければ、工事はやり易いし、花粉症なども少なくなり、町内会等の手間は減りません。余った資金を福祉等に回すことも可能となります、こうした生活に必要な権能をもつことです。

Q 3. マンションの管理組合が隣の空き地を買い取って広場にする話がある。これは先生が言う「私的政府」にあたるのではないのでしょうか。

また、別の話ですが、マンションの隣に空き地があります。高層マンションなどが建つと嫌だなと思います。どういうことに気を付けたらよいのでしょうか？

A 3. 私も隣地を買ったマンションを見たことがあります、これを共同目的に利用すれば保安圏型ゲートド・コミュニティになります。

また、高層マンションが嫌なら「政治」を怠らずに、地区計画又は建築協定を結んで建築制限を導入すべきです。

Q 4. 「私的政府」の誕生のためには、どういうふうな仕掛けが良いのでしょうか？
「私的政府」も発展していくと、結局は公共行動ができるのではないのでしょうか？このことについて、先生はどういう考えをお持ちでしょうか？

A 4. 現代人は、人間の力が及ばない「強大な力」があることを忘れてしています。このことは、進歩史観とも繋がっています。一方で、「政治」は進歩どころか後退しているのではないかと思います。アーレントというユダヤ人政治哲学者の考えでは、第二次大戦中のホロコーストを実施したとされるアイヒマンは悪くなく、ただ、彼は命令に従っただけである、としました。つまり、「政治」の傍観者になってはいけない、と彼女は言っているのです。オバマ大統領が誕生したことで喜び泣いていた政治学者がいたが、考え方がおかしいです。安倍総理が誰かに替わっても、日本の「政治」は何も変わりません。変わるためには人びと自身が変わらねばならないと思います。

いまの「政治」にはブラックボックスがあります。それは「公的政府」です。そのブラックボックスをなくすには、予算を「公的政府」から切り離して、各〈まち〉に配分することにより、人びとが為政者・執行者・立法者となるべきです。そうでなければ何も変わりません。

Q 5. 「政治」における私権を高め、自分たちで「政治」をしていく「市民」の在り方を教えていただけますか。

A 5. 中世に戻ればよいのです。「公的政府」を解体すれば、自分たちでやるしかなくなります。道路に関しては、「公的政府」は何もできなくなると思っています。

たとえば、少子高齢化の問題の解決策は、年金制度を廃止することです。そうすれば将来に子供に扶養してもらうために、子供をつくるようになります。

少子高齢化の問題の一つはフェミニストであり、彼女らが人間が一人で生きていける世界を助長していると考えられます。

Q 6. 先生の政策提言の中で、(公営住宅の)現場ができる第一歩は何でしょうか？

A 6. 住宅に神棚をつくるのはいかがでしょうか。行政として、宗教に関与することはできない、と言うのなら、行政も地鎮祭をしていると反論すればよいと思います。

「政治」は永田町の政争劇などでなく、日常にあるのです。私の家には10年前からテレビはありませんし、新聞もとっていませんが、「政治」はいつも身近にあり、それを考えることができるのです。

たとえば、私はシンクタンク業の一環で、現在、廃校をそのままの形で、 Hiltonホテルにする提案をしていますが、この成就には様々な関係者との合意、集団的決定を要するのであり、それは「政治」なのです。

議事録担当者 (M1 關谷雅彦) から

大変有意義で強く印象に残る講義をしていただき、受講生一同大感謝しています。

正規の講義終了後の、有志による自主ワークショップ?にも、お付き合いいただきありがとうございました。

今後の、大学院での学習・研究のみならず、実社会でも今回の講義の成果を生かしたいと思っております。